市場創造 おおさか企業の挑戦 ㊽

アクセス

IT資産を〝見える化〟

図作成を自動化

アクセスは1994年の設立で、金融・製造など幅広い分野の情報システム構築（SI）を手がける。得意としているのは、顧客が持つパソコンやサーバ、プリンターといったIT資産の「見える化」だ。

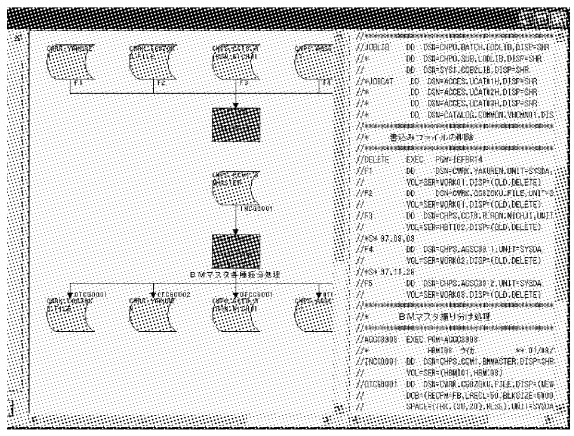
技術の変化に伴い、企業内システムには多岐にわたるIT資産が混在する。特にアプリケーション（応用ソフト）は、多数のプログラムで構成されていることが多い。

このため処理の流れ図を作るなど、人の手で見える化を行うのには手間がかかる。これを自動化したツールが、アクセスが開発した「リバースプラネット」だ。

同ツールはプログラム群を機械的に解析し、リポジトリと呼ばれる保管庫に体系立てて保存する。リポジトリをもとに処理の流れ図であるジョブフロー図や、処理相互の先行・後続関係を示すジョブグループ図を自動的に作成できる。

設計書は後から

一般的なSIの流れでは、これらの設計書をつくった後でプログラムを書く場合が多い。だが、開発や保守の現場では、もともと設計書とプログラムの整合性が取れていない、緊急でシステムトラブルを解決する必要がある、といった理由で設計書の加筆・修正が行われないケースがある。松浦徹社長はこうした点を踏まえ「開発者は設計書を信用していない。実際に動いているプログラムが一番正しいのだから、必要に応じてプログラムから設計書を作成する方が合理的だ」と説明する。



▲……ジョブフロー図などの自動作成が可能（リバースプラネット）

ITの状況を把握するメリットは多いが、その一つが属人化の防止。このシステムが分かるのはこの人だけだから異動させられない、というケースは企業には往々にしてあるが「既存IT資産の維持管理に縛り付けられると、新しいことに挑戦できない。他の部署では通用しない人材になってしまう」と松浦社長は強調する。

円滑に引き継ぎ

逆にシステムが可視化されれば、引き継ぎ作業もスムーズにできる。IT部門から事業部門へ人材を輩出できればITを活用した企画の精度が向上し、会社全体の経営にもプラスになる。

「経営者は情報システムの最適化を通じて、全社横断的な事業改革が行える可能性を認識すべきだ」と熱弁を振るう松浦社長。リバースプラネットを携え、事業改革の提案を積極化する考えだ。

……

▽社長＝松浦徹氏▽所在地＝大阪市中央区道修町3の6の1、06・6208・1600▽従業員＝220人（連結）▽製品＝情報システム▽売上高＝19億9736万円（10年3月期）

（金曜日に掲載）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社